

国際社会学部—東南アジア第二地域（大陸部）

豊かな自然と経済発展の結節点

豊かな自然と経済発展：日本と深いつながりを持つ「大メコン圏」

東南アジア第2地域（大陸部）は、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマー（ビルマ）、タイの5カ国です。インドシナ半島に広がる山地と盆地、メコン川をはじめとする大小の河川、河口に広がるデルタが特徴です。豊かな自然のもと、稲作を中心とする農業が盛んです。近年は、日本の企業も多数進出し、工業化も進展しています。さらに、インドシナ半島は交通網が整備され、国境を越えたヒト、モノ、カネの交流が盛んになり、「大メコン圏」として注目を浴びています。また、この地域は、国際協力、ビジネス、文化交流を通じて、日本と深いつながりを持っています。こうした大陸部東南アジア諸国の言語、歴史、政治経済、文化を学び、国際社会が抱える諸課題を考えていきましょう。

本学国際社会学部東南アジア第二地域では、各国の公用語であるベトナム語、ラオス語、カンボジア語、ビルマ語、タイ語のうち、1つの言語を専攻語として学びながら、東南アジア大陸部全域及び各国についての知識を積み上げていくことができます。広い視野とミクロの視点で東南アジア大陸部についての学びを深めることができます。

東南アジア大陸部の国家概要

				
ベトナム社会主義共和国	ラオス人民民主共和国	カンボジア王国	ミャンマー連邦共和国	タイ王国
人口 約 9940 万人 面積 331,344 km ² 首都 ハノイ ベトナム語紹介 Xin chào 発音 スイン チャオ 意味 こんにちは 文字 クオック・グー文字 (アルファベット文字)	人口 約 730 万人 面積 236,800 km ² 首都 ビエンチャン ラオス語紹介 ສະບາຍດີ 発音 サバーイディー 意味 こんにちは 文字 ラオス文字 (インド系の表音文字)	人口 約 1530 万人 面積 181,035 km ² 首都 プノンペン カンボジア語紹介 ជម្រាបជូន 発音 チョムリアプ スオ 意味 こんにちは 文字 クメール文字 (インド系の表音文字)	人口 約 5,148 万人 面積 676,552 km ² 首都 ネーピードー ビルマ語紹介 မင်္ဂလာပါ 発音 ミンガラパー 意味 こんにちは 文字 ビルマ文字 (インド系の表音文字)	人口 約 6,600 万人 面積 514,000 km ² 首都 バンコク (タイ語：クルンテープ) タイ語紹介 สวัสดี 発音 サワットディー 意味 こんにちは 文字 タイ文字 (インド系の表音文字)

東京外国語大学と東南アジア第二地域（大陸部）

Q：ベトナム語、ラオス語、カンボジア語、ビルマ語、タイ語のうち最も歴史が長い専攻語は？

A：タイ語です。1911年（明治44年）に東京外国語学校に設置されました。その後、学生募集を停止した時期がありましたが、1940年（昭和15年）から学生募集を再開しました。ちなみにベトナム語が設置されたのは1964年、ビルマ語は1944年に一度設置されましたが、正式に設置されたのは1981年です。ラオス語とカンボジア語は1992年です。本学における東南アジア言語の設置の歴史は、日本と東南アジアの関係史と重なっています。どのように重なっているのか考えてみてください。きっと新たな発見があるはずです。

Q：各国に留学するとしたら、どんな大学があるの？

A：東南アジア第二地域の各国に協定校があり、交換留学制度があります。

ハノイ国家大学人文 社会科学大学、ホーチミン市国家大学人文 社会科学大学、ハノイ国家大学外国語大学 以上、ベトナム)

ラオス国立大学 ラオス)

王立プノンペン大学 カンボジア)

ヤンゴン大学 ミャンマー)

シーナカリンウィロート大学、チュラーロンコーン大学、チェンマイ大学、タマサート大学、マヒドン大学 以上、タイ)

交差する民族・文化

民族と言語のつぼ

東南アジア大陸部では、実に多様な民族が暮らし、さまざまな言語が用いられています。この地域では、主にモン・クメール語族、タイ・カダイ語族、チベット・ビルマ語族、メオ・ヤオ語族の民族が歴史的に接触を繰り返してきたため、さまざまな言語が複雑に入り組むように分布しています。

ベトナムでは、多数派のキン人あるいはベト人（モン・クメール語族）を含め 54 の民族、ミャンマーでは多数派のビルマ人（チベット・ビルマ語族）を含め 135 の民族、ラオスでは多数派のラオ人（タイ・カダイ語族）を含め 49 の民族が政府に公認されています。タイでは、タイ系民族（タイ・カダイ語族）が多数派を占めていますが、北部の山間部に居住する非タイ系の 10 民族が「山地民」として政府に指定されています。カンボジアでは、クメール人（モン・クメール語族）が多数派を占め、主に山地に先住民族とされる民族が暮らしています。

これらの国々では、それぞれの国民統合の核とされる多数派民族以外は、少数民族として位置付けられています。少数民族の文化は、多数派民族との関係により、抑圧あるいは保護の対象となってきました。いずれの国でも多数派民族の言語が公用語となっていますが、多民族状況下で複数の言語を使い分ける人も少なくありません。

宗教と社会

タイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアでは、上座仏教徒が多数派を占めています。これらの国々では、早朝から黄色や濃茶色の僧衣を身にまとい托鉢をする僧侶と、彼らに食事を捧げる人々の姿が日常的に見られます。

上座仏教社会では輪廻転生と因果応報（良い行いをすれば幸せに、悪い行いをすればその報いが自分に帰ってくる）の二つの思想が人々の行いに大きな影響をおよぼしており、人々はよりよい来世への生まれ変わるために日々功德を積みます。一般に、大乘仏教と比べ上座仏教は自力救済を重視すると言われますが、功德を積むための善行には、他者への思いやりや社会福祉へと展開する方向性もあります。僧侶も、さまざまな形で人々の生活の支えとなっています。例えば、農村開発のほか、洪水などの被災地への支援、貧困層の子供達への教育、クリニックの運営などを行なっています。このほか、ミャンマーでは、政府に抗議しデモ活動に参加したり、少数民族言語の振興活動に熱心に取り組んだりする僧侶もみられます。

ベトナムは、他の国々と比較し中国の影響が強く、儒教・道教と混成した大乘仏教が信仰されていますが、南部に住むクメール人の多くは上座仏教徒です。

また、東南アジア大陸部では、外来宗教が到来する以前から土着の精霊が信仰されてきました。タイやラオスのピー、ミャンマーのナツ、カンボジアのネアククターなどの精霊は、仏教と共存しながら現在でも人々の信仰を集めています。

この地域では、イスラム教徒やキリスト教徒は少数派です。東南アジア大陸部の国々では、国民国家統合のためのナショナリズムにより、支配的な民族集団と宗教が結びつけられ、少数派を抑圧し問題化することもあります。

（執筆・生駒美樹）



ミャンマーの山間部に居住する少数民族タアン人（モン・クメール語族）。複数のサブ・グループがあり、それぞれ民族衣装が異なる。タアン人は、タイや中国雲南省にも居住している [2013年撮影]



ミャンマー第二の都市マンダレーで、早朝托鉢をする僧侶と白飯を捧げる檀家 [2012年撮影]



ミャンマーの精霊信仰の聖地ポッパ山で、精霊を拝む人々 [2012年撮影]



ミャンマーのシュエダゴン・パゴダ [2012年撮影]

多様で寛容な社会



写真上：ベトナム東北部。山の谷間に市場ができています（2012年）

写真左上：ベトナム紅河デルタ（2012年）

写真左下：ラオス・ルアンパバンのメコン川（2012年）

大陸部の自然環境—多様な社会の背景

東南アジアと聞いて、「一年中が夏」というイメージはありませんか？確かに、東南アジアはほぼ全域が熱帯湿潤地域ですが、大陸部の北方では数か月間気温が20度を下回るなど冬があります。また、大陸部の大半では明確に乾季と雨季に分かれ、季節による降雨量の違いが人々の暮らしに大きな影響を与えてきました。

東南アジア大陸部は、場所によって生態環境もさまざまです。大陸部に横たわる山脈からは、大きな河川（メコン川、イラワディ川、チャオプラヤ川、紅河）とその支流が海に向かって流れ出ています。山地、丘陵地、河川に囲まれたデルタといった異なる地形が広がり、太古から人々の暮らしのあり方は場所によって大きく異なっていました。たとえば稲作といっても山地とデルタ地帯で品種や栽培方法が異なるなど、豊かな自然環境の多様性が大陸部の人々の多様な文化を支えています。

家族関係から見る社会

多様な民族が暮らす東南アジアでは、近代国家ができるはるか前から、同じ言語や文化を共有する人々が国境を越えて行き来していました。現在の東南アジア大陸部各国では、多数派の言語以外に、さまざまな言語を話す人々が暮らしています。そこで話される言語は多様な言語グループに分類されます（モン・クメール系諸語、タイ系諸語、ベト系諸語、チベット・ビルマ系諸語など）。こうした人々が移住・定着を繰り返し、今の社会を構成してきました。

家族・親族のあり方もそれぞれの民族の個性が見られます。大陸部のタイ、ミャンマー、ラオス、カンボジアの平地に暮らす諸民族では、多くが父親側と母親側の両方の親族をたどっていく家族・親族関係を結びます。そこでは結婚後も妻方に居住し、財産相続も男女問わず均等であることが特徴で、それゆえに女性の自律性が高いとされてきました。また、歴史的にも女性の経済活動が活発です。ベトナム北部のように、父親側の男性を中心に家族を構成していく儒教の影響が強い地域もありますが、それでも「女性も外で働いて当然」という社会通念が形成されています。

写真上：市場でも店番はほとんどが女性（2022年）

写真下：新型コロナウイルス感染症対策を啓発する絵には女性の科学者の姿も見られます（2022年）



写真：ハノイで開催されたプライド週間（2022年）

こうした家族のあり方は、男あるいは女の二つに性別が分けられ、異性ととも家族を構成していくということが前提になっています。しかし、大陸部では、こうした男女観を持たない、男や女の性別を越境した人々や、同性どうしでの結びつきをつくってきた人々が暮らしており、比較的多様な性のあり方に寛容な社会と言われてきました。特に現在のタイは、東南アジア諸国のなかで性転換手術の中心地になっていることでも有名です。

大陸部の国の中では、ここ10年ほどの間、男女に収まらない性のあり方をもつ人々の権利や制度（同性婚や性別の変更など）について変革をもとめる動きが強くなっています。

（執筆・小田なら）

歴史の重層性



アンコールワットの壁画



ラオス版ラーマーヤナ:パラックパラーム

建築、美術、芸能などにインド化の影響がみられます。タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマーでは、文字もインド系文字です。



托鉢僧と喜捨をする在家信者



ラオスの仏塔:タートルアン



ランサン王国初代王:ファークム

上座仏教の僧侶・仏塔

各国の国民国家形成過程は様々です。ベトナムは国家が南北に分断されていた時代を経て1976年に統一されました。

中国の文化を受容したベトナムでは、大乘仏教が主流です。



独立運動の記憶



無名戦士の記念

東南アジア大陸部は東西交易ルートの中継地点にあっており、交易が活発化するのに伴い、紀元前後から初期国家が形成されるようになりました。5世紀頃になると、ベトナム北部（当時は中国の支配下に置かれていた）を除く地域は現地の権力者がインドの文化を受容して国家を形成していきました。アンコール王朝はその代表的な国家です。13世紀頃になると、タイ系民族がこの地域に上座仏教を統治原理とした国家を形成しました。上座仏教は現在までベトナムを除く東南アジア大陸部の国家の主要な宗教です。ただし、インド化の影響も残っており、重層的な歴史が形成されてきた地域です。15世紀から17世紀末にかけての「商業の時代」を経て、18世紀に現在の国家につながる王朝が形成されましたが、19世紀末にはタイを除き西洋諸国の植民地となりました。

第二次世界大戦期には日本の占領下・影響下に置かれたために戦場となり、甚大な被害を受けました。戦後、タイはいち早く独立国家として国際社会に復帰しましたが、イギリスとの交渉を経て1948年に独立したビルマ（ミャンマー）は政治的に不安定な状況が続き、ベトナム、カンボジア、ラオスの3か国は独立後も戦争状態が長く続きました。1990年代にカンボジア和平が成立すると、東南アジア大陸部の政治状況が安定し、地域統合がはかられ、地域開発がすすむようになりました。

日本との関係

第二次世界大戦後、戦時中の被害を補償する戦後賠償を経て日本と外交関係が樹立されました。正式に外交関係が樹立されたのは、1953年カンボジア、1954年ビルマ、南ベトナム、1955年ラオスです。北ベトナムとは1973年でした。
*タイとは1952年に国交を回復しています。

16世紀～17世紀にかけてアユタヤやホイアンには日本人町がありました。日本と東南アジア間での貿易が盛んでし

(執筆・菊池陽子)

現代の政治と経済

ASEAN(東南アジア諸国連合)と地域統合



(資料1) ASEAN 共同体（一つのビジョン、一つのアイデンティティ、一つの共同体）[撮影・宮田敏之]

1967年、東南アジアの資本主義5か国(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ)の外務大臣がタイの首都バンコクに集まり、「バンコク宣言」を発し、地域の信頼醸成と共産主義への対抗を目的に ASEAN(東南アジア諸国連合)が結成され、1984年にはブルネイが加わりました。その後、1992年からは市場統合を目指す ASEAN 自由貿易地域の取り組みが開始されました。1995年ベトナム、1997年ミャンマー、ラオス、1999年カンボジアが ASEAN に加盟し、ASEAN10 となり、ASEAN は地域統合をさらに積極的に進め、ついに、2015年、ASEANASEAN 共同体が設立されました。6億人の人口を擁する ASEAN は地域統合を通じた地域の連携を強め、新興経済地域として世界の注目を集めています。その中でも、インドシナ半島に位置する東南アジア大陸部は、豊かな自然に囲まれ、2億5千万人余りの人口を有し、その高い発展の可能性に期待が集まっています。

政治：政治的自由の拡大に向けて



(資料3) タイ王国下院議員選挙の立候補登録日を迎えた候補者たち [出典：タイ字紙『タイラット』2023年4月4日]

東南アジア大陸部の5か国の政治体制はそれぞれ大きく異なります。タイは国王ラーマ10世の下での立憲君主制、カンボジアはシハモニ国王の下での立憲君主制、2021年2月にクーデタがおきたミャンマーは軍政下の連邦共和制、ラオスは1975年社会主義体制に、ベトナムも1976年に南北が統一し社会主義体制となり、1986年ベトナム・ラオスとも市場経済改革を進めて今日に至ります。第二次世界大戦後、タイ以外の4か国は、植民地から独立を実現しました。しかし、独立後も、戦争、内戦、クーデタなど、多くの困難を経験してきました。今後、東南アジア大陸部諸国では、国民の政治的自由がどのように実現されていくかが、共通した大きな課題だと思われます。

大メコン圏開発 (GMS) プロジェクト



(資料2) 大メコン圏開発プロジェクトと日本の国際協力

[出典：外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol25/index.html>]

1992年にアジア開発銀行 (ADB) が、メコン川流域のカンボジア、中国雲南省、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナムとともに開発プログラムを開始し、日本も参加しています。このプロジェクトのもとで、道路や橋などの交通網の整備が進められています。日本は、タイとラオスを結ぶ第二メコン橋の建設など、インドシナ半島の東西を結ぶ「東西経済回廊」の整備に重要な役割を担っています。インドシナ半島の交通網が発展することにより、国境を超えたモノ、人、サービスの交流が進み、インドシナ半島に新たな時代が到来しています。ASEAN の地域統合による域内の関税撤廃とインドシナ半島の交通網の発展は、日系企業や ASEAN 企業による、国境を越えた「国際サプライチェーン」の構築を現実のものにしています。

経済：農業の重要性と製造業の発展



(資料4) ベトナム・メコンデルタの稲作 [撮影・宮田敏之]



(資料5) 製造業が発展するタイ工業団地 [出典：タイトーケンサーモ社HP]

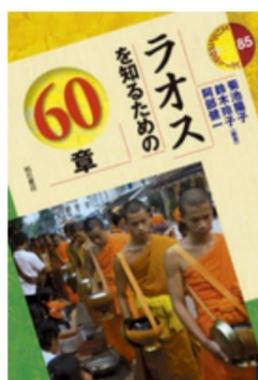
東南アジア大陸部は、豊かな自然を基盤とし、伝統的に農業の盛んな地域です。農業の中心は稲作である。特に、タイとベトナムはインドに次ぐ世界有数の米輸出国です。米以外にも、サトウキビ、ゴム、コーヒー、さらに、ドリアンなどの熱帯フルーツの栽培が盛んです。ただし、近年は、日本企業などの外国直接投資により、タイ、ベトナムなどを中心に製造業の発展も著しいものがあります。特に、タイは2022年自動車生産台数が188万台となり、世界自動車生産10位になり、世界有数の自動車生産・輸出拠点となっています。産業集積の進むタイを中心に日系企業はカンボジア、ラオス、ベトナムに広がる国際サプライチェーンを構築しており、その戦略は「タイ・プラス・1」といわれています。こうした製造業の発展により、都市部では中間層の所得が上昇し、健康志向も相まって、寿司、ラーメンなどの日本食ブームが起きています。他方、所得格差や都市と農村の経済格差は依然として大きい。格差の解消が東南アジア大陸部経済の重要な課題となっています。

(執筆・宮田敏之)

東南アジア大陸部を知るために

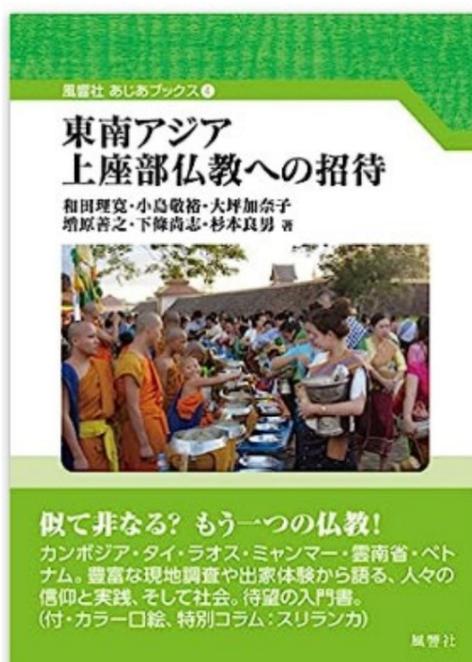
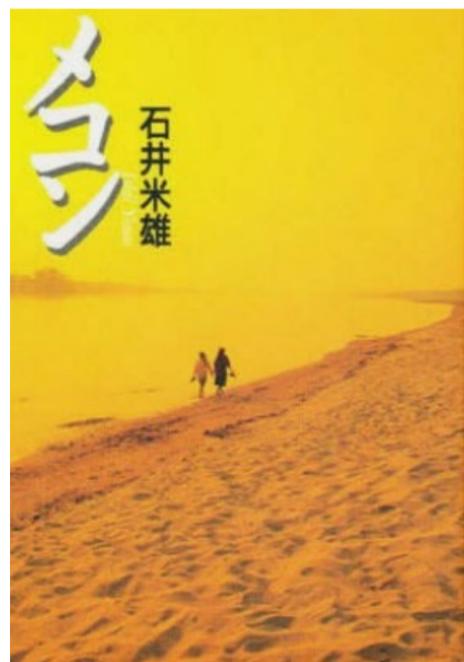
いくつか入門書を紹介します。

- 『東南アジア史 I 大陸部』
石井米雄・桜井由躬雄編、山川出版社(1999年)
- 『東南アジア史 10 講』(岩波新書)
古田元夫著、岩波書店(2021年)
- 『メコン』
石井米雄著、めこん(1995年)
- 『東南アジア上座部仏教への招待』
和田理寛、小島敬裕、大坪加奈子、増原善之、下條尚志、杉本良男 著、風響社(2021年)
- 『〇〇を知るための〇〇章』 エリアスタディシリーズ
明石書店



カンボジア、タイ、ラオス、現代ベトナム、ミャンマー各国について出版されています。

『東南アジアを知るための50章』は島嶼部も含まれますが、本学教員が中心となって執筆したものです。



【番外編】

エリアスタディシリーズでは、ASEAN についても取り上げられています。



(執筆・小田なら)